

ドイツのクラインガルテンに見る 人と園芸作物との関わり

平 智

山形大学農学部 997-8555 鶴岡市若葉町 1-23

Relationships between People and Horticultural Crops in Kleingarten in Germany

Satoshi TAIRA

Faculty of Agriculture, Yamagata University, 1-23 Wakaba-machi, Tsuruoka, Yamagata 997-8555

Summary

The concept of 'kleingarten' (small garden) originated in Leipzig, Germany about 140 years ago and has now spread broadly through European countries. The main purpose of the kleingarten is to maintain human mental and physical health through cultivating the soil and communing with nature, but the aim changed to food production for people during and after the wars. Recently German people have used it more as a recreational space, so we may now call the kleingarten a 'citizen garden'. There are more than several thousand kleingartens in Freiburg City with a population of 200,000. If an average of four people use a single kleingarten, ten percent of the citizens of Freiburg may directly use these kleingartens. There are more than 20 fruit tree species and about 40 types of vegetable grown in these kleingartens. The gardener often grows approximately ten types of fruit and vegetables. Basically they organically cultivate crops other than flowers. The products may be used by the gardeners and their family. Families often process their products into jam, pickles and so on. The gardeners' recognition of indigenous crops is not very strong, but some old and local cultivars are occasionally found in the kleingarten. Responses to a survey on the main purposes of using the kleingarten included: "to commune with nature", followed by "to be with loved plants" and "to increase one's health", "healing the heart or spirit" was the least frequent reply. It would be interesting to study further the roles of the kleingarten in preserving indigenous crops and contributing to local food production and consumption.

Key words : Germany, horticultural crops, indigenous crops, kleingarten, people-plant relationships

ドイツ, 園芸作物, 在来作物, クラインガルテン, 人間・植物関係

1. はじめに

ドイツをはじめとするヨーロッパ各国のクラインガルテン（市民農園または市民庭園。クラインガルテンの和訳については後述する）はきわめて有名である。しかし、現在実際にその中で、どんな作物が、どのように栽培され、どんなふう利用されているかについてはあまり詳しい情報がない。

この小文では、ドイツのクラインガルテンの歴史を簡単にふり返るとともに、その現状について、人と園

芸作物との関わりを明らかにする視点から見ていくことにしたい。

1) クラインガルテンの歴史

ドイツ語の「クラインガルテン (Kleingarten)」は直訳すると「小さな庭」の意味であるが、これまでわが国では「市民農園」と訳されることが多かった（全国農業協同組合中央会, 1989; 松尾, 2005）。しかし、最近の利用状況から判断すれば、むしろ「市民庭園」と訳した方が実態にあっているという指摘もある（松田, 2004）。これは、最近のドイツのクラインガルテンは、芝生や池、子供たちの遊具置き場や砂場などの占める面積が増加する傾向にあり、かつての「農

2006年7月24日受付。9月1日受理。

園」のイメージがうすれているケースがしばしばあるからである。

何をもってクラインガルテンのはじまりとするかは難しい問題を含むと思われるが、今から140年あまり前、ドイツ東部のライプツィヒに最初のクラインガルテン協会が設立されたことが今日のクラインガルテンの基礎になっているといえよう（全国農業協同組合中央会，1989；松田，2004；松尾，2005）。協会設立の中心になったのは医師のシュレーパー博士で（松田，2004），当時工業化が進む社会の中で人々が土に親しむことによって健康を回復すること，とくに子供たちに自然にふれあう機会を与えることを目的とした一種の社会運動（「クラインガルテン運動」）であった。実際，ドイツ各地では現在もシュレーパー博士の活動を称えて，クラインガルテンのことを「シュレーパーガルテン」と呼んでいることが多い。

ドイツのクラインガルテンは，戦時中や戦後は食料の確保や増産のための役割も担ったという。おそらくその当時は，主食のジャガイモなどのほか，それぞれの地域にあった主要な作物を相当量生産するフィールド（農地）でもあったと推測される。

ドイツのクラインガルテンの運営や整備については，後にもう少し詳しく説明することにしたい。なお，ドイツのクラインガルテンに対応する市民農園は，イギリスやフランスをはじめオランダや北欧諸国などにも広がりを見せている。それらは基本的には類似しているものの，それぞれの国でしばしば独自の起源を持ち，独自の発展をとげている面も多いといわれる。それらの詳細については別の書物など（全国農業協同組合中央会，1989；松尾，2005）に詳しいのでここではふれないことにする。

2) 聞き取り調査の目的

2004年，著者はドイツ南西部のフライブルクを中心に，ドイツ国内の六つの都市のクラインガルテンでガルテナーに対する聞き取り調査を実施した。

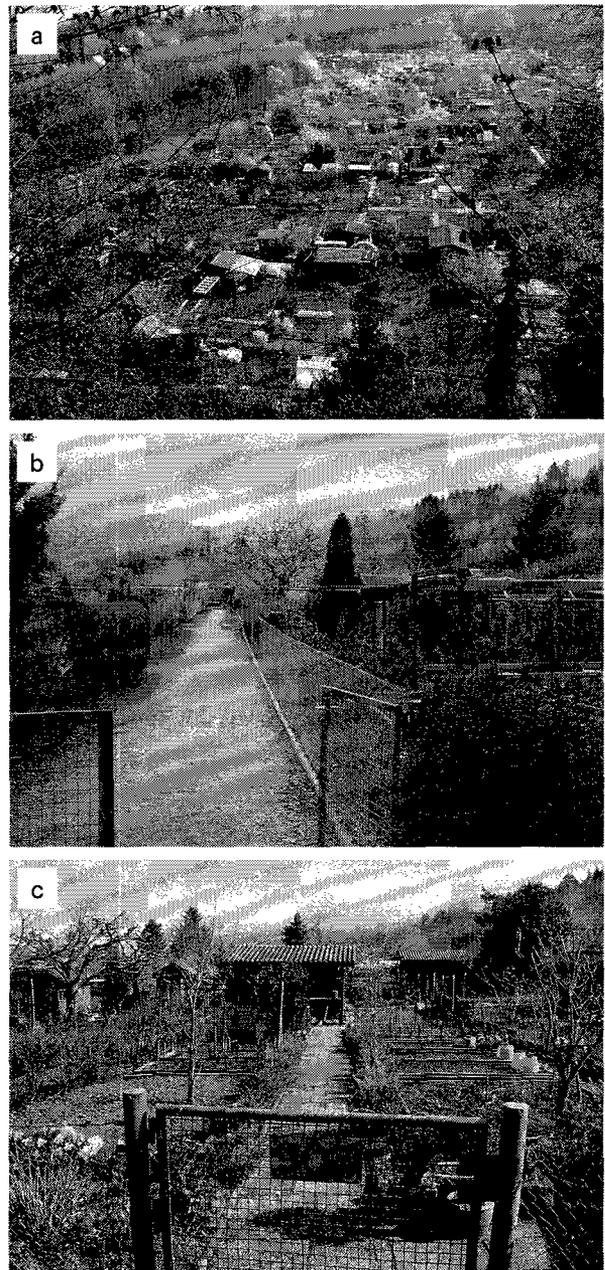
調査の主な目的は，ドイツのクラインガルテンの現状を知り，それを人と植物の関わりを探究する視点から考察することであった。すなわち，現在ドイツではクラインガルテンの中で，何がどのようにして作られ，どのように利用されているのか，さらに，人々はどのような目的（あるいは意識）を持ってクラインガルテンを利用しているかを明らかにしたいと考えた。

調査の具体的な方法や主な質問項目などを説明する前に，主な調査地になったフライブルクのクラインガルテンの実情を簡単に説明しておきたい。

2. フライブルクのクラインガルテン

1) クラインガルテンの現状と整備計画

フライブルクはドイツ南西部のバーデン・ヴュルテ



第1図. フライブルクのクラインガルテン。

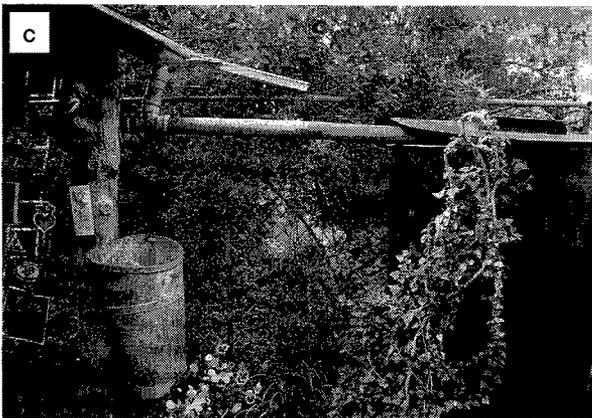
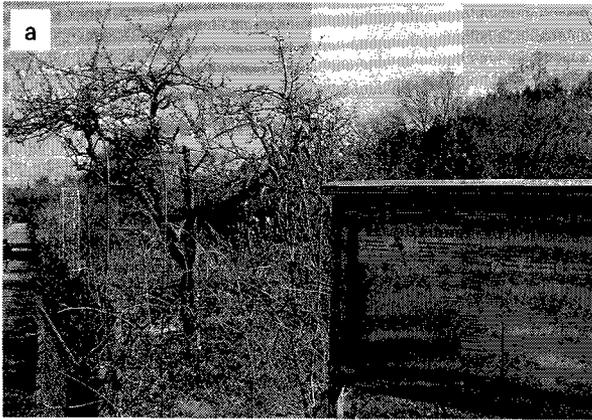
a：高台から見おろした市内ボンハルデ地区のクラインガルテン。まるで住宅地のようなものである。

b：クラインガルテン内の通路。基本的には誰でも自由に通行可能である。

c：各区画にはガルテン番号がつけられている。門にはふつう鍵がかけられている。

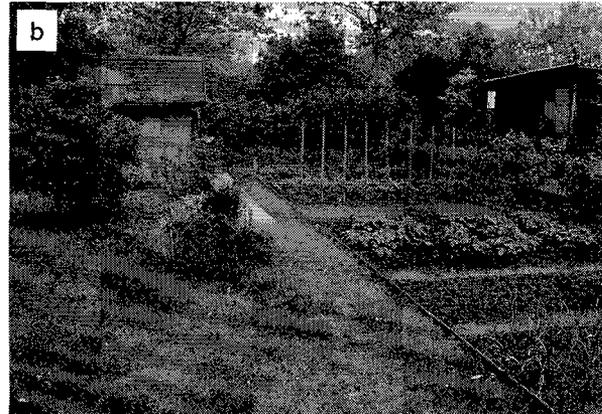
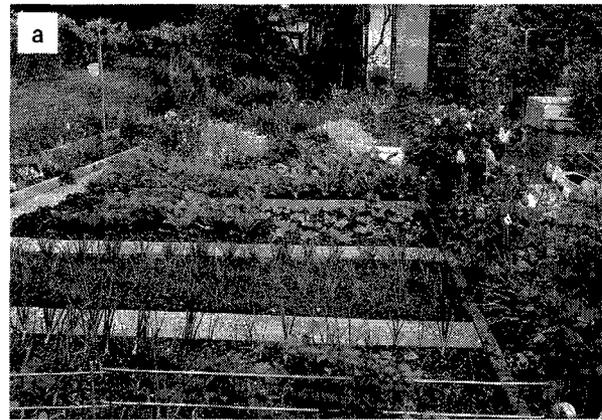
ンベルク州にある人口約20万人の都市である。

フライブルクでは，ドイツの他の都市とほぼ同様に，クラインガルテンの整備や設置は市の都市整備課と庭園課が専門の立場から共同で作成したマスタープランに基づいて行われている。1990年に取りまとめられた「フライブルク クラインガルテン開発計画書1990～2000」によると，1990年現在フライブルク市内にあるクラインガルテンは約4,700区画であるが，需要要求量から計算した必要数は約6,500区画であったので，今後10年間で少なくとも約1,800区画の新



第2図. クラインガルテンに見られる施設。

- a : クラインガルテン協会の掲示板。集会やイベントのお知らせやところによっては天気予報なども張り出される。
- b : 「ラウベ」と呼ばれる休息兼収納小屋。普通は床面積約24㎡以下である。宿泊は原則として禁止だが、想像以上に立派なものが多い。
- c : ラウベの屋根に降った雨水をためるタンク。水道や小川の水が引かれているガルテンも多いが、多くの人が資源の有効利用に熱心だ。



第3図. クラインガルテンのさまざまな土地利用。

- a : ラウベ以外の土地のほとんどを畑として利用している例。これほど熱心に果樹や野菜、花などを作る人は近年珍しいという。
- b : 質素なラウベに芝生張り。土地の半分程度を畑に利用するドイツでは典型的なパターン。
- c : 休息スペースとして快適なラウベに芝生、バーベキューコンロ。作物を作る畑はほんの少しである。最近の若い家族に多いパターン。

設が必要であると述べられている (Stadtplanungsamt und Gartenamt, 1990)。

同市では1990年以降整備と新設が順次進められ、2004年の時点では約6,000区画を越えているとのことであった (私信)。また、2004年当時次期の計画書を作成中であったので、現在は新しい計画書に基づいた整備が継続しているものと思われる。

いずれにしても、現在フライブルクには6,000区画以上のクラインガルテンがある。今仮に、1区画あた

りの利用者を一家族平均4人と仮定すると、優に2万人以上の人々が利用していることになる。つまり、市民の10人に1人以上が直接利用している計算になる (第1図)。

フライブルクのクラインガルテンは市内の10数か所に1~10ha程度の広さの大きささまざまなものが点在している。クラインガルテン1区画あたりの面積は300㎡程度のものがもっとも一般的である。敷地内にはふつう「ラウベ (Laube)」と呼ばれる小屋が設置さ

れている。もともとは農機具などの収納小屋と休憩スペースをかねたものであるが、別荘と見違えるくらい立派なものもしばしばある。通常ラウベの敷地面積は24 m²程度以下に制限されているため、あまり大きな建物は建てることができない。また、仮眠はよいが、ラウベ内での宿泊は禁止されていることが多い。トイレも普通はない(第2図)。

クライנגアルテンには水道が引かれているところもあるが、小川の水や井戸水を利用しているところも多い。灌水には雨水を利用する人も少なくない。電気は通常はないが、太陽電池パネルを取り付けてラジオなどを聞けるように工夫している人がたまにいる。

多くのガルテナーたちは早朝か夕方にクライングアルテンにやってくる。その日の収穫物を新鮮なうちに食卓に運ぶためである。もはや仕事をしていない年配の人達の中にはクライングアルテンで一日の大半を過ごす人もいる。若い家族の中には週末などに友人を招待してバーベキューパーティーに興じる人も多い(第3図)。

先述したように、クライングアルテンの運営は協会が行っている。各協会は協会連盟や自治体の援助を受けながら、非営利的に運営を行っている。ガルテナーはそれぞれが協会の会員になり、共通の通路部分の除草などの作業は分担して行うシステムになっている。

フライブルクの場合、クライングアルテンの1年間の賃借料は約1万円ほどである。ただし、新しく借りる場合でラウベや大きな果樹などがある場合にはこれらを買収するかたちになる。このようなクライングアルテンのいわば財産評価は、協会から選出された複数の委員が客観的に行うしくみになっているという。

クライングアルテンの中では基本的には何を作ってもよいが、ところによっては敷地面積の半分以上を単なる緑地として使用してはいけない(つまり、少なくとも敷地の半分には何らかの作物をつくる義務がある)などのルールが設けられているケースもある。また、いわゆる化学農薬の使用を自主的に制限している協会が多いが、基本的にはガルテナー個人の判断によることが大きいようである。

2) 聞き取り調査の方法

聞き取り調査(平ら, 2006)は、2004年の春から秋にかけて、フライブルク市内の5か所のクライングアルテンで各20人ずつ計100人と、そのほかに五つの都市(ハンプルク, ポツダム, ライプツィヒ, カッセルおよびアウグスブルク)で各10人ずつ計50人、全部で150人のガルテナーに対して行った。調査の対象者は、それぞれのクライングアルテンで出会ったガルテナーの中から無作為に選び、質問は通訳を介してドイツ語で行った。

主な質問事項は、クライングアルテンで栽培している果樹および野菜の種類とそれらの利用法、在来品種の

有無、病害虫の防除法、クライングアルテンを利用する目的などである。

調査をフライブルク以外の五つの都市(前出)でも行った理由は、地域による違いがどの程度認められるかを知るためであった。そのため、これらの都市はできるだけドイツ全土から、また、旧東ドイツ地域も含むように選定した。ただし、各都市あたりの調査対象者はそれぞれ10人ずつのみであった。調査数が少ないので断定的なことはいえないが、まずクライングアルテンの地域差について簡単にふれておくことにする。

3. クライングアルテンの地域性について

いずれの都市でもクライングアルテンは鉄道の線路脇の敷地や河川敷近くなどに多く、その地理的配置や面積などには大差がなかった。一見クライングアルテンのように見えるものの中にもクライングアルテン法に基づかない貸し農園や私的なものもかなり多いといわれているが(松尾, 2005)、筆者が調査したガルテンはすべて法に基づく正式なクライングアルテンであった。

クライングアルテンの発祥の地であるライプツィヒのあるクライングアルテンには、それを記念する小さな博物館が設けられていたが、それ以外は各地ともほぼ類似したたたずまいであった。

筆者は、クライングアルテンで実際に作られているものは気候条件の違いなどによって地域ごとにより異なるのではないかと予想していたが、調査した範囲ではそれほど大きな違いは認められなかった。ただし、ハンプルクなど北に位置する都市のクライングアルテンほど、栽培される作物の種類が若干減り、それらの栽培期間も短くなるようであった。

このように、ドイツではクライングアルテンの地域差はそれほど大きくないと思われたので、調査結果については150人分のデータを一括集計することにした。なお、調査対象者は男が約60%、女が約40%で、年齢(推定を含む)は61歳以上が大半を占めていた。また、対象者の過半数はクライングアルテン利用歴が10年以上のいわばベテランであった。

4. クライングアルテンに見る人と園芸作物との関わり

1) クライングアルテンの中の果樹と野菜

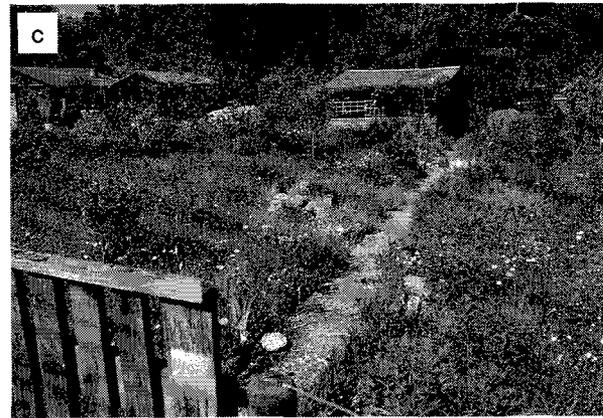
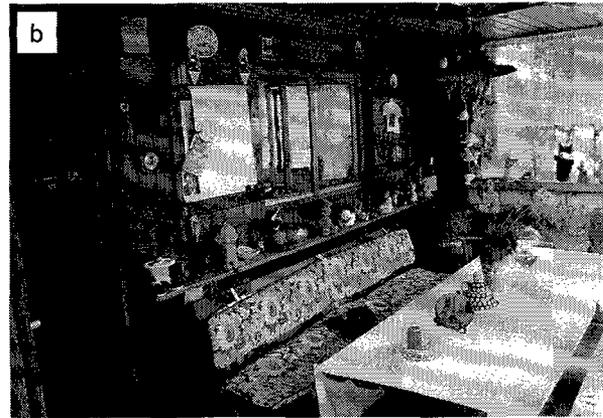
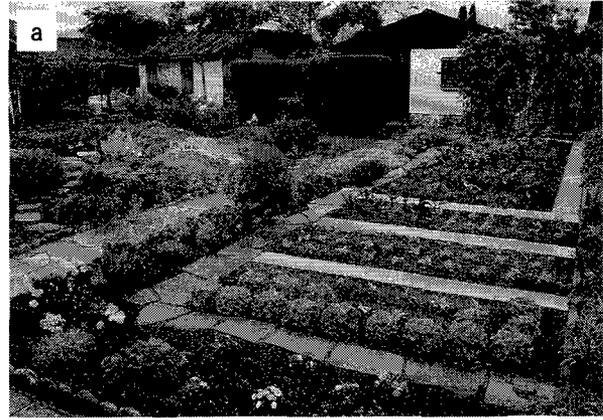
調査したクライングアルテンには、リンゴ、フサスグリ、ベリー類、オウトウ、セイヨウスモモ(プルーン)、セイヨウナシ、ブドウなど20種類以上の果樹およびトマト、ハーブ類、レタス、コールラビ、インゲンマメ、タマネギ、ズッキーニ、パプリカをはじめとする40種類以上に及ぶ野菜が栽培されていた。ルバーブ(食用ダイオウ)やフェルトサラート(ノヂシャ



第4図. クラインガルテンにおける環境保全型農業。
 a : 自作の堆肥置き場。各家庭の生ゴミを持ち込んで堆肥にする人が多い。ちなみにフライブルクでは生ゴミの回収費は自己負担である。
 b : サワーチェリー（酸果アウトウ）の樹にフェロモンを利用した害虫トラップをつけているガルテナー。効果を熱心に説明してくれた。
 c : レタス畑に置かれた害虫トラップ。中にはビールが入っていて、アルコールの匂いに誘引されて虫が集まるという。

の一種)などの季節野菜も見られた。果樹、野菜とも10種類前後を栽培しているガルテナーがかなりの割合を占め、少ない種類の作物を大量に作っているガルテナーはほとんどいなかった。

収穫した果物や野菜は、本人と家族で利用する場合がほとんどであったが、約半数のガルテナーは余れば親戚や知人・友人に分け与えることもあると答えた。ただし、収穫物を遠隔地に住む子供たちなどに送るという回答は皆無であった。



第5図. クラインガルテンで見られたさまざまな風景。
 a : とても手入れの行き届いたクラインガルテン。ベリー類を中心とした果樹、各種の野菜や花がみごとに配置されている。
 b : ラウベのテラスに整備されたリビングルームさながらのパーティースペース。
 c : 何らかの原因で放置されてしまったガルテン。使用継続の是非は協会が客観的に判断するシステムになっている。

果物はそのままデザートとして食べるほか、自分たちでジャムやママレードに加工したり、ケーキやパイの材料やジュースの原料として使用される。野菜はその日の料理やサラダの材料として利用される場合がほとんどであったが、ピクルスにしたり、いったん冷凍保存して後日利用される場合もあった。

2) 栽培の特徴と在来作物

栽培している作物に対して、何らかの病害虫防除をすると回答したのはガルテナーの約70%であった。ただし、農薬（化学薬品）の使用は最小限にするか花

卉などの非食品に限り、果樹や野菜に対しては「Bio農薬」(天然物起源の成分のみを含むものやフェロモンなどの生物農薬をドイツではこう呼んでいる)や特別な防除法(たとえば、イラクサの煮汁や石鹼水をうすめて散布したり、ビールの香りで害虫を誘引したりするなどの環境に負荷を与えにくい方法)を積極的に採用している人が30%前後もいた。防除はまったくしないと答えた人の中には、手で害虫を取り除くという人もいた。

また、多くのガルテナーがクラインガルテン内に家庭から出る生ゴミなどを持ち込み、堆肥化して肥料として使用していた(第4図)。クラインガルテン内の雑草や植物の遺体なども堆肥化される場合がほとんどであった(ただし、前述の病害虫に犯された植物体は、これとは別に焼却処分するとの回答が多かった)。

このように、多くのガルテナーは勉強熱心で、雑誌や専門書を読み、さらに、よく知っている人から情報を得て、環境保全型の作物栽培を実践することに労を惜しまないように思われた。

なお、クラインガルテンの多くは整然と整備されていたが、まれに利用を放棄したと思われる区画が見つかった。このようなケースでは、理由(たとえばガルテナーが病気で療養中であるなど)によっては使用の返上を留保したりすることもあるという(第5図)。また、作物を作らない、除草をまったくしないなど、いたずらに管理を怠った場合は、会員から選ばれた複数の委員が合議して使用許可を取り消すこともあるという。

一方、クラインガルテンの中にある果樹や野菜の中にはその地域の在来品種ではないかと判断されるものが少なからず認められたが、ガルテナーのそれらに対する意識はあまり高くなく、せいぜい古い品種(種類)であるといった認識であった。筆者は、絶滅の危機にある在来品種が、ドイツではクラインガルテンの中で、それらの存在価値を十分認識しているガルテナーたちによって意識的に守られているケースがあるのではないかと予測していた。つまり、クラインガルテンはそういった意味でも一定の役割を果たしているのではないかと期待していたが、150人のガルテナーに対する聞き取り調査の結果からそんな一面が浮かび上がってくることはなかった。

3) クラインガルテン利用の目的

人と植物との関わりを探究する視点から考えると、ガルテナーたちがいったい何のためにクラインガルテンを利用しているのかという点が興味深い。この点について質問したところ、ガルテナーたちの答えには「自然に親しむため」が最も多く、「植物が好きだから」がこれに次ぎ、以下「健康増進のため」「食料を生産するため」「生活のリズムを作るため」の順で、「心

を癒すため」という答えは意外に低い回答率であった。

また、かなり多くのガルテナーが「一言でいえばホビー(趣味)」ともコメントし、ドイツ人の多くはクラインガルテンを利用するのは趣味の一部と認識していることが明らかになった。

この点わが国はどうであろうか。日本の市民農園に関する調査や研究はこれまでもいくつか認められるが(松尾, 1979; Matsuo, 1994; 松尾, 2005), たとえば鹿児島市内の市民農園の利用者に対する意識調査では、健康の増進に対する期待とともに食料の生産という実質的な目標を上げる人が多かったという(松尾, 2005)。

クラインガルテンや市民農園の利用目的に関する国際比較や地域間比較は、人と園芸作物との関わり方を考えるうえで興味深い問題である。また、クラインガルテンや市民農園が、これまでその地域の在来作物の生産や保全にどのように関わってきたか、また、今後どのような役割を果たしていくことができるかについてもより詳しい研究をする必要があると思われる。さらに、その地域の食材をその地域内で生産し消費する、いわゆる「地産地消」活動におけるクラインガルテンや市民農園の貢献についても今後注目していく必要があると思われる。

5. まとめ

ドイツ東部のライプツィヒに発祥したクラインガルテンは約140年の歴史を有し、現在ヨーロッパ各国に広く見られる。もともとは土や自然に親しむことによって健康を維持することが主な目的であったが、戦中戦後は食料増産の役割も果たしたといわれる。最近では、「市民農園」というより「市民庭園」と呼ぶ方がふさわしいようなリクリエーション空間としての利用が盛んになってきている。

ドイツ南西部にある人口約20万人のフライブルクには現在6,000区画以上のクラインガルテンが整備されており、1区画あたりの利用者を平均4人とする、市民のおよそ10人に一人がクラインガルテンを直接利用していることになる。フライブルクをはじめとするドイツのクラインガルテンでは、20種類以上の果樹や40種類にも及ぶ野菜が実際に栽培されており、10種類前後の果樹や野菜を栽培しているガルテナーも少なくなかった。花卉を除く果樹と野菜の栽培は基本的に無農薬有機栽培が主体であり、収穫物は本人と家族で利用するケースがほとんどであった。ジャムやピクルスなどへの加工利用も盛んであった。多くのガルテナーの在来作物に対する認識はさほど高くなかったが、クラインガルテン内にその地域に古くからある品種や独特の利用法を有する作物が少なからず見

られた。クラインガルテンを利用する目的は、「心を癒すため」よりむしろ「自然に親しむため」や「植物が好きだから」という回答が多かった。

クラインガルテンがその地域の在来作物の保全に果たしている役割やいわゆる「地産地消」にどの程度の貢献しているかなどについてさらに調査を進める必要があると思われた。

引用文献

- 松田雅央. 2004. 環境先進国ドイツの今. pp. 43-52. 学芸出版社. 京都.
- 松尾英輔. 1979. 家庭園芸に関する研究. 2. 鹿児島市民農園について. 鹿大農学術報告. 29: 249-

258.

- Matsuo, E. 1994. Japanese perspectives of allotment and community gardening. *Acta Hort.* 523: 143-149.
- 松尾英輔. 2005. 社会園芸学のすすめ—環境・教育・福祉・まちづくり. pp. 233-244. 農文協. 東京.
- Stadtplanungsamt und Gartenamt. 1990. Kleingarten Entwicklungs Plan Freiburg 1990 - 2000. Stadt Freiburg. Germany.
- 平 智・高林奈美・宍戸麻依子. 2006. ドイツのクラインガルテンにおける果樹と野菜の栽培事例. 人間・植物関係学会雑誌 6(別): 26-27.
- 全国農業協同組合中央会. 1989. クラインガルテン写真集. 市民農園. クラインガルテンの世界から—農のあるまちづくり—. 農文協. 東京.